

外記猿

長唄

全詞章

杵屋三郎助 述

別題「外記節猿」「猿」

罷り出でたる某は、ずんと気軽な風雅者、日がな一日小猿を背に、背負ひ續けてナ
姿如法やなん投頭巾

夜さの泊りは何処が泊りぞ、奈波か名越か

室が泊ぞ、室が泊ぞ

泊を急ぐ後より

小猿廻せや猿廻しオオイオオイと招かれて、立帰りたる半町あまり、玄関構へし門の内、
女中子供衆とりどりに、所望所望の詞の下、猿の小舞を始めけり

〔祝言の舞〕ヤンラ目出度や目出度やナ、君が齢は長生殿の、不老門の御前を見れば、黄金の
花が咲くや乱るる、咲くや乱るる

旦那の御前でお辞儀をせ、ころりとせ転りやころりや、やつころりと、子持ち寝姿お
目かけや、さつても粋な品物め

〔お染久松〕是は浪花に浮名も高き、河原橋とや油屋の、一人娘にお染とて、年も二八の
恋ざかり、内の子飼ひの久松と、忍び忍びに寝油を、親達の夢にも白絞、サア浮名の立つは
絵双紙へ

松の葉越しの月見れば、暫し曇りて又冴ゆる、月は片われ宵の程、船の
中にはなにとおよるぞ、苦を敷寝の楫枕、ひんだの踊は一ト踊

〔二上り〕五月五月雨苗代水に、裾や袂を濡らしてしよんぼりしよんぼりと、植ゑい植ゑい
早乙女

実に面白や踊るが手元、辰巳午や春の小馬が鼻を揃へて参りたり、参りたり
猿に烏帽子を着せ参らせて、猿に烏帽子を着せ参らせて、いさむ神馬の手綱をとらせう、
手綱取らしよのんほのふいよへ

〔本調子〕一の幣立て二の幣立て、猿は山王まさる目出たき、まさる目出たき

獅子と申すはすみずみすみずみ、住吉八幡普賢文殊のめされたる、猿と獅子は御しゆしよの物
アレ音楽の声諸法実相と響き申せば、地より泉が奏上して、天より宝が降り下る、尚千秋や
万歳と、俵を重ねぬめんめに、楽しいなるこそ目出度けれ、楽しいなること目出度けれ